

[特別講演]

華岡青洲の医学と思想に関して最近明らかになったこと

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

華岡青洲（以下「青洲」）の研究は最近急速に進歩した。新規に得られた知見は多岐にわたるが、この中で一般にも関心が高いと思われる事項についてのみ紹介する。

京都遊学前の青洲について、医学の基本と臨床の初歩を父の直道に学んだこと以外何も知られていなかった。京都大学富士川文庫に「青洲華岡 泰」撰の写本「丸散便覧」がある。この写本の持つ意味は甚だ重要である。青洲は京都遊学の初期に「玄洲」とも号し「泰」とも名乗っていた。それ以前の号は「南嶽」である。つまり「丸散便覧」は1782～3年に成立した写本である。中川修亭に乞われて31方の処方解説したと考えられるが、冒頭の処方吉益東洞の十二律方である。青洲が遊学時には東洞の十二律方を含む処方に関してすでに深い知識を持っていたこと、そして東洞に強い関心を寄せていたことを示している。

他医が治せない疾病の治療に強い関心を寄せた青洲は、永富独嘯庵「漫遊雜記」の西洋では乳癌を手術的に治療しているとの文章に啓発され、乳癌の治療に執念を燃やした。選択の手術時における全身麻酔の必要性を認識して修亭の協力を得て研究を行った。そして纏められたのが「麻薬考」であり、全身麻酔薬9方、局所麻酔薬5方が収められている。「麻薬考」によって麻沸散は花井仙蔵の処方を大幅に改めたものであることがわかった。また1796年頃までに青洲は有志者十数人に対する全身麻酔に成功していることが知られる。演者の麻沸散を用いた動物実験と有志者の実験も紹介する。同時に青洲は、伝統的処方だけでは治療には不十分で、非伝統的処方、つまり奇方も不可欠であるとしてその収集も始めた。その成果は中川修亭によって1791年に「禁方拾録」としてまとめられた。青洲の書に「方に古今なし。唯その知を致すにあり」とはこのことを指すのである。

青洲による最初の全身麻酔下の乳癌腫瘍切除は1804年10月13日に行われたが、患者 藍屋 勘はすでに左腋下のリンパ節転移が認められた。勘は翌年2月26日に死亡した。勘の死は青洲にとって大きな衝撃であり、春林軒では一時的に入門者を受け付けず、乳癌手術も行われなかった。1805年の入門者0人の謎も勘の死が関係している。勘の手術時に図が描かれたが、巷間流布している図は原図を時計回りに90度回転したものであった。

麻沸散下に行う外科手術は全国的に喧伝され、新しい医術を学ぼうと多くの医師が春林軒に入門した。「内外合一活物窮理」の語句が「華岡青洲墓誌銘」に刻されていることから、これが門人に示された青洲の標語であると約200年間信じられてきたが、演者の研究によって「活物窮理」のみが青洲の言葉であることが明らかになった。「活物窮理」は「生体の研究」と解釈されているが全くの誤解である。「物を活かし、理を窮める」と読み、「物、つまり気・血・水の円滑な循環を図り、患者が持つ本来の寿命を全うさせる」意である。

青洲は教育熱心であった。医療の精髓を短い語句として門人に示した。「医惟在活物窮理」、「方無古今」、「口不能言筆不能書」、「得与不得」や「無懈怠研究」であるが、これらは吉益東洞が発した言葉と殆ど同じであった。青洲は東洞の強い影響を受けたことが知られる。

講演では青洲自筆とされてきた臨床に関する史料を紹介する。この史料の存在については60年前に知られていたが、以来所在不明であった。今回、所蔵者のご厚意で詳細に調査することが出来、本学会で発表する許可も得られたので紹介したい。

青洲研究も国際的でなければならない。演者は先年、青洲に関する英文の著を出版した。偶々、これを読んだアメリカの Emily Bunker 氏は医師ではないが、青洲に関心を持ち演者に協力を求めて一般読者向けに小著を出版した。青洲に関する情報は小生が提供した。最新の情報も含まれている。今後はこのような形での研究も推進していく必要がある。